

The Women's Studies Association of Japan

発行 日本女性学会
事務局 〒272-0023
千葉県市川市南八幡1-16-24
TEL 047-370-6068
FAX 047-370-5051
ホームページ
<http://www.joseigakkai-jp.org/>

学会ニュース

日本女性学会
第125号 2012年5月

*会員に送付しているペーパー版の「学会ニュース」とは、内容が一部異なります

目次

2012年度日本女性学会大会プログラム…	1	会員の著作紹介……………	8
大会事務局から……………	2	日本女性学会第17期選挙選出幹事選挙 開票結果……………	9
2012年度日本女性学会大会 趣旨説明……………	2	竹村和子フェミニズム基金 ——助成対象の研究や活動の募集……………	9
発題者から……………	3	大会会場アクセス……………	10
個人研究発表・ワークショップ……………	4	会員情報……………	別紙
幹事会議事録……………	7		

2012年度日本女性学会大会

日時：6月2日（土）・3日（日）

会場：大正大学（7号館）

東京都豊島区西巣鴨3-20-1

アクセス：都営地下鉄三田線 西巣鴨駅下車 徒歩2分／埼京線 板橋駅東口下車 徒歩10分／都電荒川線 新庚申塚駅又は庚申塚駅下車 徒歩7分（詳しくは10頁をご覧ください）

参加費：会員 500円／常勤の非会員 1000円／常勤以外の非会員 500円

プログラム

第1日 6月2日（土）

- 12:00 受付開始（7号館4階フロア）
- 13:00～16:30 シンポジウム
- 16:45～17:45 総会およびDVD上映
- 18:00～20:00 懇親会

第2日 6月3日（日）

- 9:30 受付開始（7号館6階フロア）
- 10:00～12:00 個人発表
- 12:00～13:00 休憩
- 13:00～15:00 ワークショップ

大会事務局から：保育／書籍販売／懇親会申し込みについて

- 保育は、1歳以上の未就学児について受け付けます。ご希望の方は、5月22日までにお申し込みください（申し込み先：秋山／伊藤、受信トラブルを避けるため、兩名にお送り願います）。保育が必要な日にちと時間（何時から何時まで）、お子さんの年齢をお知らせください。保育料は、お子さん1人1日につき1,500円（保険料込）を利用者にご負担いただき、残額を学会が負担いたします。申し込みと同時に「日本女性学会」（郵便振替 00890-6-31306）へお振込ください。利用当日の3日前（6月2日の場合は5月30日水曜日、6月3日の場合は5月31日木曜日）まで、キャンセルが可能です（保育料が返金できます）。
- 今年度は、その他のバリアフリー対応として、ボランティアによる要約筆記（パソコン打ち込み・画面表示）、拡大コピーのご要望を受け付けます。ご希望の方は、5月26日までにお申し込みください（申し込み先：伊藤）。
- 書籍販売の希望者は、5月26日までにお申し込みください（申し込み先：北仲／福嶋）。売り場は提供できますが、ご自分で管理をお願いします。チラシについても同様です。
- 懇親会は、準備のためできるだけ事前にお申し込みください（申し込み先：清末）。参加費用は、常勤の方は4,000円、非常勤の方は2,000円です。当日受付時に徴収いたします。会場は大会会場内で、ケータリングを利用します。
- 宿泊につきましては各自手配をお願いします。

日本女性学会 2012 年度大会シンポジウム

6月2日（土）13:00～16:30（7号館4階741号室）

再考・フェミニズムと「母」——異性愛主義と「女」の分断

パネリスト：加納実紀代（女性史・ジェンダー史研究）主な著書『女たちの〈銃後〉』（筑摩書房 増補新版インパクト出版会）、『母性ファシズム』（学陽書房）、『天皇制とジェンダー』（インパクト出版会）、『日本のフェミニズム10 女性史・ジェンダー史』（岩波書店）ほか

松本麻里（運動史研究）主な論文「水の重さと反原発」『現代思想』2011年10月号、「海賊〈未満〉海女と原発」『現代思想』2011年7月号ほか

水島希（科学技術社会論）主な論文「技術と知をわたしたちの手にとりもどす——原発事故後の放射線対策と女性」『女たちの21世紀』（No.67、2011年）、「1970年代における人口妊娠中絶の実態と批判——女性活動家たちによる問題の定位とその含意」日比野由利他編『テクノロジーとヘルスケア——女性身体へのポリティクス』（生活書院、2011年）ほか

コーディネーター：荒木菜穂、西倉実季、福嶋由里子、堀江有里

シンポジウム趣旨説明

コーディネーター：荒木菜穂、西倉実季、福嶋由里子、堀江有里

フェミニズムには積み残してきた課題が多くある。そのひとつに「母」をめぐる事柄を挙げることができるのではないだろうか。2011年3月11日の東日本大震災以降、マスメディアにおいて、復興支援活動や放射能被曝から子を守ろうとする活動を担う女性たちの姿が「母」のイメージと強く結びつけられる機会がより多くなってきている。いままでも存在した「女＝母」というイメージがより一層突きつけられるなかで、女たちのあいだに温度差や乖離、そして分断がもたらされている。

たとえば、これまでのフェミニズムのなかには、「産む性」の立場からの主張を本質主義的な「母性礼賛」と見なし、ジェンダー構造の再生産に加担する危険性をはらんでいるとみる批判もあった。たしかに、役割として「女」に押し付けられる「母」のイメージは、異性愛主義によって構築されてきたものでもある。しかし、とり

わけ、東日本大震災以降の現状に照らし合わせると、「母」の立場に依拠した主張をそのようにしか位置づけないことで、女性間にあらたな分断が生み出されているのではないだろうか。

今回のシンポジウムでは、「母」をめぐる問題に対して本質主義か否かの議論に陥りがちであったフェミニズムを批判的に検討する。そしてそれは、「母」や「女」といったカテゴリーと、個人の多様性を尊重することの矛盾について向き合いきれてこなかったという課題を、反省とともに再考する試みでもある。

シンポジウム発題者から

当事者性と一代主義

加納実紀代

母は歴史を通じて存在したが、讃え保護し利用する「母」は近代国民国家の成立にともなって誕生した。日本では 20 世紀に入ってからである。それは異性愛主義の構築でもあった。「母」は戦時には「兵隊さんのために」働いたが、戦後は平和のシンボルになった。1954 年、ビキニ事件を契機に女性たちが原水禁署名運動に立ち上がり、その中から「生命を生みだす母親」に依拠した平和運動が誕生したからだ。第 2 波フェミニズムはそこにある「母=愛・平和」という本質主義を批判した。また母親運動は原子力の平和利用（原発）を容認して出発している。

1980 年代、チェルノブイリ原発事故を受け、女性たちはふたたび「母として」立ち上がった。それに対してフェミニストの間から、「なぜ子どものためなのか、自分がイヤだとなぜいわないのか」という批判があがった。自己解放・当事者性をいうフェミニズムとしては当然である。しかし放射能被害は持続性をもち、世代を超えて生命に悪影響を及ぼす。当事者性をいう限りフェミニズムは一代主義に陥りがちだが、あくまで自己解放・当事者性に立ちながら未来にひらかれたものにするにはどうすればいいか。また異性愛主義による女の分断をもたささない「母」はあり得るだろうか。

脱 / 反原発とフェミニズムをめぐる— 1986 年→ 2011 年、回帰し、反復される問い

松本麻里

3・11 以降の反 / 脱原発運動には多くの母親が主体として登場している。報告では現在の状況と 1986 年のチェルノブイリ事故後に多数の女性、母親らが主体と

なった「反原発ニューウェーブ」という運動との共通性、また当時のフェミニズムの母性主義批判言説等を検討する。母親という立場から社会運動に参加する点について「産む / 産まないという女性間の分断強化につながるのでは？」という問いも浮上しているが、そのような分断はいかなる力学により生じてしまうのか？という点に関しメディア等で反復される「母親像」と実際の主体のずれなどを軸に検証したい。また現在の草の根運動の内実は行政交渉や計測活動等、極めて実践的で、従来、国家や社会が掲げる「母性主義イデオロギー」とは一線を画し、強化されるリスクに対する身体を巡る闘争という質をも内包している。フェミニズムはこうした運動の両義性をどう捉えるのか？という点について報告したい。

放射性物質に対する「母親運動」を読み解く— 首都圏における母親たちの動きと科学技術知の再編成

水島希

福島第一原子力発電所事故の後、日本全国で原子力発電や放射性物質に関する市民の動きが活発になった。中でも「母親」たちの動きはメディアを通じて広く知られるようになったが、女性運動の側からは母性主義の強化を懸念する声もあがっている。本発表では、震災後に顕在化した「母親」による動きの 1 つとして、関東圏における放射性物質に対する運動に焦点をあてる。放射性物質に関しては、原子力発電所からの距離や降下量の地域差が、深刻さや焦燥感の度合いに大きな差異をもたらしている。この中で、一般に「被災地」とは認識されていない関東の多くの地域で、母親たちの懸念を発端とした市民運動が生まれ、科学的データの収集や地域の放射線量測定、情報公開、行政や教育機関との交渉といった実践的活動が行われている。この運動の特徴、および、運動を通じて形成されつつある科学技術知の傾向を俯瞰し、家父長制や異性愛主義といった観点から議論したい。

総 会

6月2日(土) 16:45 ~ 17:45 (7号館4階741号室)

* 議案は当日配布します。会員のみならず、ふるってご出席ください。

* 会員以外で18時からの懇親会に参加いただけるみなさまには、総会と並行してDVDを上映いたします。

どうぞご利用ください。上映作品は当日のお楽しみ。場所は7号館6階761号室です。

個人研究発表・ワークショップ

6月3日(日) 10:00～12:00

【第1分科会】(7号館6階762号室)

司会：北仲千里

台湾における外国籍配偶者のDV被害者に対する支援政策とその課題

清末愛砂・福嶋由里子

台湾では、台湾人男性と婚姻したアジア諸国出身の外国籍配偶者に対する支援策が現在、官民共同の形で実施されている。本研究報告では、これらの外国籍配偶者が瀕している婚姻生活における様々な問題のうち、特にDV問題に焦点をあて、台湾における近年の国際結婚の動向、外国籍のDV被害者保護政策の具体的な内容、および現地調査を通して見えてきた課題について発表する。

1958年(昭和33年)の強姦罪認知件数増加をどう読むか

牧野雅子

1958年、強姦罪の認知件数が前年比で約1.5倍に増加した。この原因としては一般に、発生件数が増えたのではなく、輪姦形態による性犯罪が非親告罪化されたことによると考えられている。このことは、以後の刑法改正による性暴力の抑止効果の根拠としても用いられている。だが、この認知数の増加は刑法改正によるものなのだろうか。本発表では、従来の統計解釈の問い直しを行いたい。

【第2分科会】(7号館6階763号室)

司会：高松香奈

インドにおける女性の政治参加とジェンダー化する村落ガヴァナンス——ケーララ州T県S村を中心に

喜多村百合

インドにおける地域ガヴァナンスは、1992年の憲法改正による分権化策の導入で、地方議会議席における33.3%(州によっては50%)の女性枠が実現し、100万人を超える女性議員が活動していることから、「静かな革命の始まり」と注目されている。本発表では、報告者の調査村のケーララ州T県Sグラマ・パンチャーヤトを事例に、女性の地域政治への参加の実態と生成される「エイジェンシー」の分析を通して、意思決定におけるジェンダー視点の重要性を明らかにする。

登録型派遣社員女性のストレスと健康管理体制

速水裕子

本研究では、登録型派遣労働の経験のある女性20名にストレスや労働安全衛生管理状況について聞き取りを行った。職場での物理的環境、過重労働、職場の人間関係、将来への不安、身体的負担、自由時間の少なさ等のストレスの実態が明らかになった。健康問題の改善については、労働者が派遣元に申し入れ、派遣元が派遣先に改善を求めても改善されない、派遣元、派遣先で連絡調整が十分行われていない等の労働安全衛生管理体制の不備や不十分な実態が明らかになった。

明治末期から昭和初期の小学校女性教員をめぐる政治

氏原陽子

本発表は、人間の権力関係を政治と捉え、明治末期から大正期にかけて増加した小学校女性教員をめぐる、小学校長や彼女らを養成する高等女学校、師範学校が小学校女性教員をどのように捉えていたのか、彼らの言説に対して、小学校女性教員がどのように対抗しようとしたのか、あるいはしなかったのか、当時の教育雑誌や著書、全国小学校女教員会の議論を分析して明らかにする。

【第3分科会】(7号館6階764号室)

司会：青山薫

アメリカ黒人女性作家が描く連帯——作品を繋ぐ線

大橋稔

アメリカ黒人女性作家の作品を読み解こうとするとき、個々の作家の作品を単独で扱うだけではなく、それぞれの作品を結ぶ線を見つけ出すことも大切である。なぜなら彼女たちは、先行する作家が描いた内容を取り込みつつ、その主張をさらに進化/深化させることを目指しているからである。本報告では、「連帯」がその線のひとつに成り得ることを示す。また黒人女性作家の系譜がブラック・フェミニストの系譜そのものであることを明らかにする。

翻訳にみる日本語のジェンダー・バイアス

—洋楽「対訳」を材料に

今井大輔

「翻訳」とは、「国家間」、「言語間」という広範囲に渡るものである一方、単に「言い換え」と捉え直すなら、普段の「会話」も「あるテーマについての発展的な言い換え作業」に他ならず、その意味では個人レベルでも行

われる日常的なものである。本研究では、洋楽「日本版」の「対訳」を材料に、「日本語」のジェンダー・バイアスを探る。具体的な方法としては、翻訳された歌詞を「女らしさ／男らしさ」の面から類型化した上で、その内容と「一人称」の選択との関連性を明らかにし、また「一人称」が同時に「二人称」、すなわち「対人関係」へと影響を及ぼしているか分析する。

ティーンズ誌にみる女子中高生の性愛表象の変容 —1970～90年代の『セブンティーン』における」恋愛記事の分析

桑原桃音

本発表では、1970から90年代の女子向けティーンズ雑誌『セブンティーン』における性愛に関する記事を分析し、中高生の性が語られる場で形成されるセクシュアリティを浮き彫りにする。そこでは一方で、愛の象徴として処女をささげる女子中高生像が理想とされつつ、他方で初体験に伴うリスクが表象される。70から90年代の性愛記事では、この初体験における愛の理想とリスクの組み合わせが常に語られており、変容していたのは妊娠、避妊、処女膜の破裂への不安といった初体験のリスクの内容であった。

【第4分科会】（7号館6階765号室）

司会：海妻径子

家族介護における介護者の配置とジェンダーについて

島原三枝

介護保険制度は「介護の社会化」と言われ、介護は家族だけで担うのではなく、社会的に担われるべきものとなった。しかし、この制度が施行されて10数年を経た現在も、介護の多くは家族によって担われている。近年は男性介護者も増えているが、やはり家族介護の多くは女性が行っている。家族の中の女性が介護者となる理由は個々さまざまなものではあろうが、介護を担う者とそうはならない者の間にある違いは何であろうか。主介護者が決定される過程をインタビュー調査や先行調査から考察する。

授乳期における母子の葛藤と利害の対立

村田泰子

80年代半ば以降、産育に関する社会学的研究において、母子の葛藤や利害の対立に光を当てる研究が多く行われた。その多くはフェミニズム的な問題関心をもって行われ、母子の一体性に関する神話を相対化する役割を

果たしてきた。しかし、授乳期に関しては、未だ十分な検討がなされていない。本報告は、英米の諸研究および現地調査に基づき、この期に特有の母子の葛藤や利害の対立を分析するための枠組みの構築を試みる。

「初版 母性看護学」テキストにみる母性観とその背景

西村理恵

昭和30年代以降の日本の母子保健政策は、乳児死亡率低減に向けて、妊産婦の病院・診療所等での管理が推奨された。看護学領域においては、昭和42年に「母性看護学」が妊産婦の健康管理・保健指導を担う分野として成立した。本報告では、初版「母性看護学」テキストにおける母性に関する記述から、当時の看護学における母性観を探るとともに、母子保健政策との関連について報告する。

6月3日（日） 13:00～15:00

ワークショップ1（7号館6階762号室） 戦争と女性ワークショップの実践—フィリピン 元「従軍慰安婦」の体験をもとに

草柳和之

元「従軍慰安婦」問題は、その深刻さに加え、我々が加害国としての責任を負っているために、恐怖や怒りの感情を呼び起こし、同問題の直視に困難を伴う。このワークショップ（WS）は、14歳時にフィリピン・レイテ島で“慰安婦”を強要された女性の体験を描いた絵と物語を活用した体験学習である。小グループの討議や、チェックシートに記入して感想を分かち合うなど、我々にとって身近に引き寄せて考えやすいものである。同WSは、男女平等教育と平和教育のツールとして、大学・高校の授業、市民団体の学習で利用できる。発表では、同WSを実際に体験していただき、参加者と共にこの種の体験型学習の可能性について考えていきたい。

（*ワークショップは複数メンバーによる実施が原則であるが、本ワークショップについては汲むべき経緯があり、1人での実施を承認した）

【ワークショップ2】（7号館6階763号室） 性暴力サバイバーが生きやすい社会へのボトム アップ

柳本祐加子・辻雄作

特に1970年代以降女性運動により、性暴力は重大な女性の人権に対する侵害であるにもかかわらず、犯罪規

定等の不備により、それが裁かれない問題性が指摘され、これまで多くの国で性犯罪規定の改正が行われてきた。日本でも女性運動が同様の指摘をしているにもかかわらず、いまだに改正はされていない。しかしこの現状は国連からも是正勧告を受け、第三次男女共同参画基本計画は、規定の見直しを目標に掲げた。やっと改正の議論が俎上に上がったといえる。その議論に運動がどのような提案を携えて参加できるか。それをみなさんと一緒に考えてみたい。

【ワークショップ3】（7号館6階764号室）

物語から考えるジェンダー

黛道子・宮津多美子・伊藤淑子

表面的にはジェンダー平等が常識化するなかで、「強い男、弱い女」「導く男、守られる女」という旧来のジェンダー観に基づく物語はいまでも記憶に刷り込まれ、男と女の「あるべき姿」のイメージは絶えず物語を通じて再生産され続けているといえないだろうか。本ワークショップにおいては、アメリカ文化における物語の形成と消費の視点から、児童文学、スレイブ・ナラティブ、ディズニー・アニメを取り上げて話題提供と問題提起をし、物語とジェンダー観の構築について広く検証し、議論を交わしたい。

会員の著作紹介

- ・ 古庄ゆき子編著、豊田道子、佐藤智美著『野上彌生子』ドメス出版、2011年12月
- ・ 岩淵宏子、長谷川啓監修・尾形明子編集『[新編] 日本女性文学全集〈第4巻〉』葦柿堂、2012年1月

会員の著書紹介

以下のルールで会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、ニュースレター担当者までご連絡ください。

- ・ 会員が執筆・編集している単行本（分担執筆含む、雑誌をのぞく）
- ・ 1年以内の発行物
- ・ ご本人の申し出があったもの
- ・ 寄贈は条件としない
- ・ 寄贈いただいたもので会員の著作と判明したもの

ニュースレター担当

青山薫

西倉実季

各種お知らせ

各種お知らせ欄は、幹事会および会員等からの公共性の高い情報（学会員にとって有益な、研究会、学会、公募情報などのお知らせ）を掲載します。掲載希望はニュースレター担当者までご連絡ください。

ニュースレター担当

青山薫

西倉実季

会員主催研究会の募集

日本女性学会は会員主催の研究会に対し以下の応募要件にしたがって補助金助成をおこなっています。

〈応募要件〉

- ・ 研究会の趣旨が女性学会の趣旨に適切していること
- ・ 少なくとも会員に対して、公開の研究会であること
- ・ 研究会のタイトル、趣旨、企画者（会員個人・会員を含むグループ）、開催場所、開催日時、研究会のプログラム、全体の経費予算と補助希望額（2万円以内）が決定していること（未決定部分は少ないほど良いが、場所・プログラム・経費については予定＝未決定の部分を含んでいても可）
- ・ 学会のニュースレター・ウェブサイトに載せる「研

究会のお知らせ」の原稿（25字×20行前後）があること（研究会の問い合わせ先を明記する）

- ・ 研究会終了後、実施報告文を学会のニュースレターとウェブサイトへ寄せること（補助費はこの原稿提出後に出金する）
- ・ 学会総会での会計報告に必要なため、支出金リストと総額での企画者による領収書を提出すること
- ・ 申し込みは研究会担当幹事まで、広報期間確保のため原則として開催の3ヵ月前までにすること
- ・ 詳細の問い合わせも研究会担当幹事まで

研究会担当 千田有紀

堀江有里

日本女性学会第 17 期選挙管理委員会よりお知らせ

日本女性学会第 17 期選挙選出幹事選挙 開票結果

2012年3月23日に日本女性学会第17期選挙選出幹事選挙の投票を締め切り、同3月29日に第17期選挙管理委員会が開票作業を行いました。その結果を下記の通りご報告いたします。選挙管理委員会が上位の方から順次打診し、次期幹事会幹事候補者となることを承諾して下さった方の氏名に下線を引いております。また、本報告では打診した方の氏名と得票数のみを公表いたします。

本選挙においては、投票用紙に記載された会員の氏名に間違いがあり、訂正版の投票用紙を再送させていただくなど、会員の皆さまにご迷惑をおかけしましたことをあらためてお詫び申し上げます。

(日本女性学会第17期選挙管理委員会)

記

【開票結果】

投票数：190 票	17 票 諸橋 泰樹
無効票数：68 票（訂正前の投票用紙 64 票、11 名以上の候補者を選んでいる投票用紙 4 票）	16 票 <u>伊田 広行</u> 、荻野 美穂
有効票数：122 票	15 票 <u>荒木 菜穂</u> 、江原 由美子
30 票 <u>千田 有紀</u>	13 票 戒能 民江、堀江 有里、牟田 和恵
26 票 上野 千鶴子	12 票 <u>金井 淑子</u> 、佐藤 文香、武田 万里子、 <u>田中 かず子</u> 、細谷 実
24 票 館 かおる	10 票 <u>中村 桃子</u> 、橋本 ヒロ子、 <u>古久保 さくら</u>
23 票 <u>北仲 千里</u>	9 票 風間 孝、 <u>田間 泰子</u>
19 票 木村 涼子	以上
18 票 伊田 久美子、 <u>井上 輝子</u>	

竹村和子フェミニズム基金—助成対象の研究や活動の募集

一般財団法人竹村和子フェミニズム基金は、昨年12月に逝去した竹村和子さんの遺志により、フェミニズム／ジェンダー研究、または女性のエンパワメントや女性へのサポートの視点で実施される活動に資する研究・調査に対して、助成金を提供することを目的として発足しました。

このたびの募集は2012年4月16日より開始します。募集の締切は2012年6月18日（当日消印有効）です。本基金設立の趣旨、組織、助成内容、応募方法などの詳細については本基金ウェブサイト（<http://www.takemura-fund.org/>）に掲載されていますので、ご覧ください。

お問い合わせは、竹村和子フェミニズム基金の助成事務を代行する、NPO法人お茶の水学術事業会にくださいますようお願いいたします。

特定非営利活動法人お茶の水学術事業会

「竹村和子フェミニズム基金」係

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

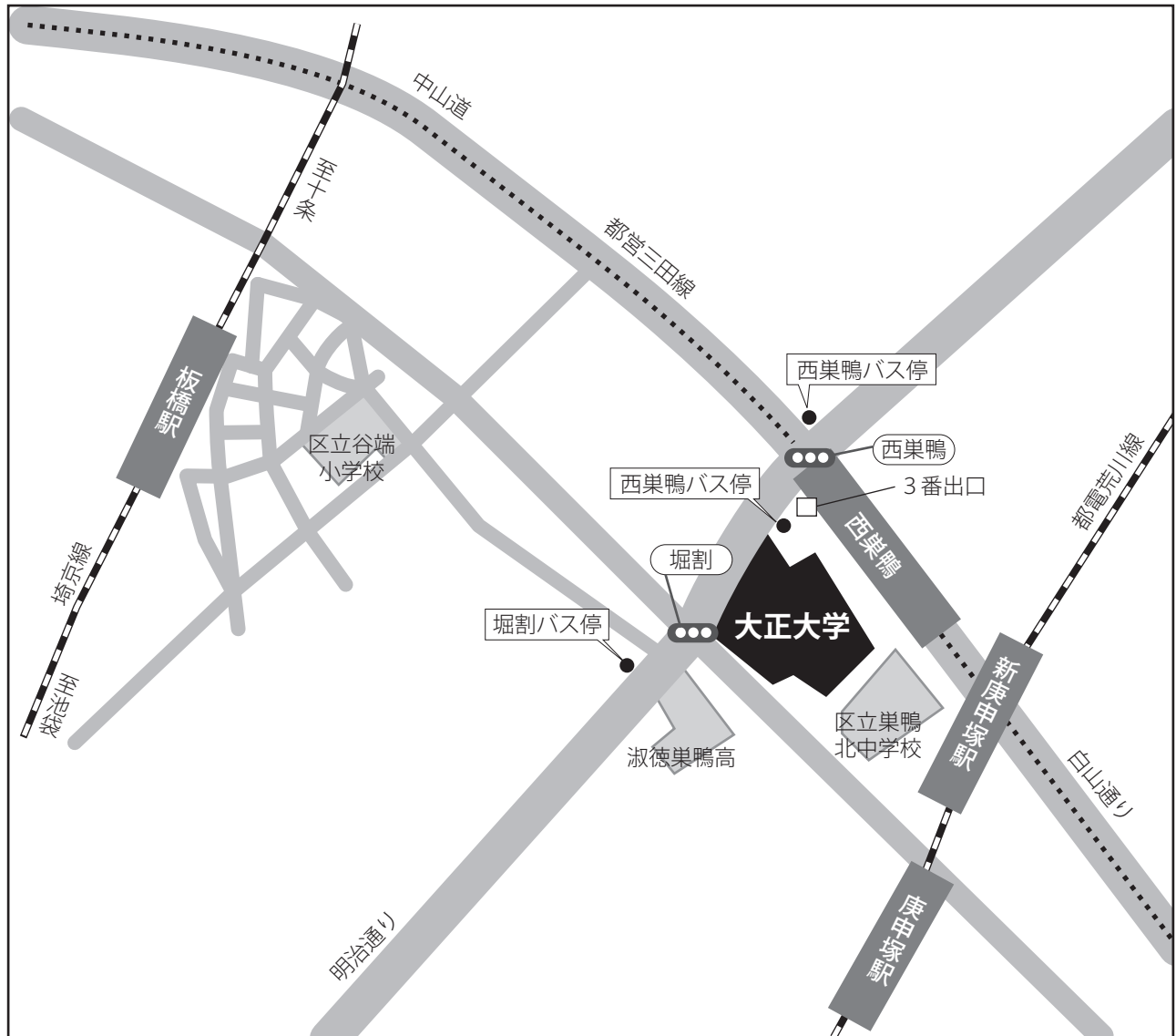
お茶の水女子大学 理学部3号館204

TEL & FAX: 03-5976-1478

Email: t-fund AT（送信の際は @ マークに） npo-ochanomizu.org

大会会場アクセス

大正大学（7号館）
東京都豊島区西巣鴨3-20-1



都営地下鉄三田線 西巣鴨駅下車 徒歩 2分
埼京線 板橋駅東口下車 徒歩 10分
都電荒川線 新庚申塚駅または庚申塚駅下車 徒歩 7分